

荒木高子 プロフィール

- 1921年(大正 10) 兵庫県西宮に生まれる
父は華道末生流宗家荒木白鳳(幸吉)、母・豊
- 1936年(昭和 11) 15歳
父の死去に伴い、高等女学校を中退して、家元代行をつとめる
- 1950年(昭和 25) 29歳
このころから、ガラスのオブジェの創作をはじめ
- 1952年(昭和 27) 31歳
画家須田剋太に師事し、絵画を学ぶ
- 1956年(昭和 31) 35歳
大阪市梅田で、白鳳画廊を開く
画廊は、1960年(昭和 35)まで経営
- 1963年(昭和 38) 42歳
画廊を閉めた後、アメリカ・フランス・スペインをめぐる
この年、西宮市の自宅に築窯
立杭(篠山市今田町)丸八窯、京都市工芸研究所(現京都市産業技術研究所)
で、本格的に陶芸を学ぶ
この後、独力で研究を重ね、自身の造形の世界を作り上げていく
- 1978年(昭和 53) 57歳
「聖書」作品をはじめ美術展に出品し、優秀賞を受ける
- 1979年(昭和 54) 58歳
「聖書シリーズ」の3作品が、日本陶芸展で最優秀賞を受ける
これ以降、聖書シリーズが展開され、旺盛な制作活動を続ける
- 1990年(平成 3) 70歳
三田市藍本にアトリエ(荒木陶芸研究所)を開設
- 1995年(平成 7) 74歳
阪神淡路大震災で、西宮市の自宅が全壊
三田市のアトリエに住み込み、造形を続ける
- 1997年(平成 9) 76歳
三田市市民文化賞
- 2004年(平成 16) 82歳
病(肝不全)を得て入院中の三田市民病院で死去



アトリエ内部 提供：三田市



MOUNTAIN BIBLE

1989年

44.0×82.0×82.0cm



WAVE BIBLE

1989年

26.0×83.0×83.0cm

これらの作品は、アメリカのネブラスカ州オハマに滞在したときに制作された。
その翌年、三田市藍本にアトリエを開いた。

陶芸家 荒木高子が作陶をはじめたのは、40歳を超えてからであった。
独力で研究を重ね、新たな造形の世界を展開し、82歳で生涯を閉じるまで、たゆみなく製作を続けた。

初期の彼女の作品は、円筒形を少し湾曲させた形で、松葉などを燻べて煤を素地に定着させる黒陶の製法で作られた。
磨かれた黒陶の表面は磨かれているが反射ではなく、吸い込むような力強さの色調を見せる。

荒木高子の名を世に知らしめたのは、1978年京都における「日本クラフト・コンペ展」に初めて出品され、以降生涯を閉じるまで、約20年にわたって作り続けられた「聖書」シリーズである。

シルクスクリーンの技法で、聖書の文言が丹念に写し取られ、今にも崩壊しそうな様相を示している。

彼女独自の表現である「聖書」は、見るものの心の奥底に働きかける力を持ち、さまざまな思いを呼び覚ます働きさえ有している。

晩年は、脳梗塞を患うなど入退院を繰り返したが、作陶の意欲は衰えず、病室に制作途中の作品を持ち込み、創作に励んだ。

最後の入院となった三田市民病院で洗礼を受け、2004年3月15日、生涯を終えた。